

# 田坂広志の風を語る

## 第8回 未来の世代に「目に見えない価値を大切にできる社会」をGIVINGプロジェクト

本連載の第6回(※)で提唱した「VSO P運動」(Volunteer Service One day Project)が、未来の世代に「目に見えない価値を大切にできる社会」を贈る「GIVINGプロジェクト」へと進化し、日本青年会議所や公益資本主義推進協議会などが全国運動として活動を開始した。これから、この運動は、どこに向かうのか？



田坂広志  
Hiroshi Tasaka  
1951年生。74年東京大学卒業。81年同大学院修了。工学博士。87年米国バテル記念研究所客員研究員。90年日本総合研究所設立参画。取締役等歴任。00年多摩大学大学院教授就任。同年シンクタンク・ソフィアバンク設立。代表就任。03年社会起業家フォーラム設立。代表就任。08年世界経済フォーラム(ダボス会議)のGlobal Agenda Councilメンバー就任。10年世界賢人会議Club of Budapest日本代表就任。11年東日本大震災に伴い内閣官房参事就任。13年全国から2600名の経営者やリーダーが集まり「変革の知性」を学ぶ場、「田坂塾」を開塾。著書は80冊余。

### GIVINGプロジェクトへと進化したVSO P運動

加藤 田坂先生は、この連載の第6回で、VSO P運動(Volunteer Service One day Project)というものを提唱されましたね。地域の商店や企業が協力・協働して、毎月一日だけ、地域住民に貢献する無償のボランティア・サービスを提供する運動です。この運動を全国各地で進めることによって、地域の「ボランティアリ経済」が活性化し、知識、関係、信頼、評判、文化、共感などの「目に見えない資本」が生まれ、広がっていく。また、それが「マネタリー経済」も活性化し、地域経済全体を活性化していく。その考えを述べ

られましたね。この運動は、現在、どうなっているのでしょうか？

田坂 あの第6回の記事は、多くの読者から注目を頂き、地方創生や地域振興に取り組み様々な自治体や組織、団体から問い合わせを頂きました。特に、真に豊かな地域を創るためには、「ボランティアリ経済」と「目に見えない資本」を重視すべきだとの提案は、地域で活動する自治体の首長や職員の方々、NPOや市民団体の方々から、多くの共感を得ました。そうした中から生まれてきたのが、VSO P運動を核とする「GIVINGプロジェクト」です。このGIVINGとは、Gift of Invisible Values In the society for the Next Generationの略称ですが、日

本語では、「未来の世代に『目に見えない価値を大切にできる社会』を贈ろう」というプロジェクトです。

加藤 GIVINGとは面白い命名ですね。私も一児の母として「未来の世代への責任」には深く共感しますが、このプロジェクトは、どのような経緯で生まれたのでしょうか？

### 日本青年会議所の全国運動へ

田坂 実は、私は、サッカーの全日本代表監督を務めた岡田武史さんからの誘いで、岡田さんがオーナーになったFC今治のアドバイザーを務めているのですが、岡田さんは、このFC今治の活動を通じて、地域の活性化にも取り組んでいます。そし

ような活動が動き出したのですか？

田坂 この「GIVINGプロジェクト」の呼びかけに呼応して、最初に動き出したのが、日本青年会議所(JC)ですね。JCの新会頭、山本樹育さんは、会頭就任の所信表明の中でも、「目に見えない資本を重視する『新たな資本主義』を創造するため、社会実験を行う」と述べられており、1月に1万人が集まって行われたJC京都会議でも、そのことを宣言し、その中核的運動として、JC全体で「VSO P運動」に取り組むことを呼びかけました。

加藤 日本青年会議所は、歴史ある全国組織ですね。

田坂 そうですね。JCは、65年の歴史を持ち、全国697支部、3万2000人の会員を誇る全国組織ですので、この組織が全体としてVSO P運動に取り組むことになったのは、大きな意味を持ちますね。

加藤 JCは、そもそも、中小企業の青年経営者などが集まって地域に根差した活動をする組織ですから、地方創生や地域振興という意味でも、大きな力を発揮できますね。

### 公益資本主義推進協議会などの動きも始まる

田坂 そうですね。これに続いてVSO P運動に取り組むのが、大久保

秀夫さんが会長を務める公益資本主義推進協議会(PICC)ですね。この組織も、資本主義の変革をめざし、多くの企業経営者が集まっている全国組織ですので、面白い動きになると思います。

また、このJCとPICCに加えて、NPOのETICや一般社団法人リバース・プロジェクトも、賛同組織としてGIVINGプロジェクトに参加しているのです。これから色々な動きが起これると思います。

加藤 ETICは、宮城治男さんが代表理事を務め、全国各地で社会起業家の育成と支援を行っている組織ですので、注目ですね。また、リバース・プロジェクトは、伊勢谷友介さんが代表を務めています。伊勢谷さんもまた、「未来の世代に何を残すのか」の志を語り続けている、ある意味での社会起業家ですね。

このVSO P運動、今後、どのように展開していくのでしょうか？

田坂 今年の7月に、JCのサマーカーンファレンスが、再び1万人を集めてパシフィコ横浜で開催されますが、これに合わせ、GIVINGプロジェクトとして、全国各地で進んでいるVSO P運動を紹介し、VSO P大賞の表彰などを行いたいと考えています。このイベントに

よって、この運動をさらに全国に広げていきたいですね。

### 自治体や大学、そしてメディアや市民も参加する運動へ

加藤 それにしても、このVSO P運動、第6回のこの連載対話で田坂先生が提唱されたものが、短期間で、GIVINGプロジェクトという形になり、JCやPICCなどの志ある組織が、具体的にこの運動を始めることになりましたね。

田坂 その背景には、多くの方々が現在の日本の状況に対して危機感を持っていることがありますね。金融資本に支配された資本主義の在り方、中央依存の地域経済の在り方、営利主義の企業経営の在り方、そうしたものに對する危機感ですね。

それが、こうした形で発起人の方々が集まり、幾つもの賛同組織が集まるという結果になっているのかと思います。そして、この運動が広がっていく触媒となったのが、この『ソーラー(アース)ジャーナル』という一つのメディアですね。

加藤 そうですね、これからの時代のメディアは、こうした社会的な運動を起こしていく触媒になっていくことができるのですね。



インタビュー  
加藤晶子  
Akiko Kato  
(株)リクルート・キャリアを経て、キャリア・カウンセラーとして独立。20~30代の学生や社会人に1000人規模でのキャリア・カウンセリングを行う中で、働くことやキャリアについて人生の早期に考えることの重要性を痛感し、小学生向けのキャリア教育スクール、キッズイノベーション(Kids Innovation)を立ち上げる。最近では、この教育事業の代表を務める傍ら、子ども達の未来を見据え、社会や時代がどこに向かっているのか、様々な識者のインタビューを行っている。



### RECOMMENDED BOOK

「仕事の技法」(講談社刊)  
すべての分野、そして職種に共通の最も根幹的な「仕事の技法」は、実は「対話の技法」。中でも最も重要なものが、「深層対話の技法」。身につけることによって、我々の「仕事力」を圧倒的に高めてくれるその技法とは？ ビジネスにおける数多くの修羅場をくぐり抜けてきた著者が到達した究極の「仕事の技法」、コミュニケーションの真髄を語る23話。

※当連載は、姉妹紙『SOLAR JOURNAL(ソーラージャーナル)』で掲載していたものを継続掲載しています。